野間清治生誕の地論争

― 果たして教員宿舎は何処か ― その②

図書館長　大瀬祐太

～新宿学校と
　　揖取素彦県令の思惑～

野間清治が幼少年時代を過ごした新宿村は、渡良瀬川（江戸時代までは渡瀬川と表記した）が作り出した左岸段丘上に位置し、北は桐生新町、安楽土村、南は境野村、東は桐生川対岸の栃木県足利郡菱村、西は渡良瀬川（対岸は山田郡如来堂村）に接している。

弘化元年（一八四四）作成の『新宿村絵図』によると、天台宗眼亀山最勝寺を宿頭に南北十三町、中央に幅五間の道路をつくり、その両側に用水路を設け、間口十三間、奥行き四十四間前後に地割りをし、屋敷地としたことがわかる。はじめ館林藩徳川氏、のち複数の旗本の知行地となり明治維新をむかえた。村高四〇八石余、文政七年（一八二四）時の家数三〇〇戸、人数一五〇〇人、納辻永一〇〇両であった（堀越靖久編『近世期の桐生』）。戊辰の役で難をのがれて、野間好雄夫妻（清治の父母）は、この地で生計をたてる。渡良瀬川の支流で南北朝時代に開削された新川の付近の六本松という町はずれに住み始めた。産気づいた妻の身を案じた新宿村の大尽、大澤茂兵衛や後に教頭として赴任した田口広吉らの支援を受けながら、明治六年（一八七三）十月十九日、創立された新宿学校の宿舎に身を寄せる。明治十年前後のことである（『野間清治伝』）。開校当時の学校は、新宿村七十九番地の常見林蔵所有の二階建家屋一棟（平屋建て一棟が併設されている）を借り受け、仮校舎としたもので、当時の戸数四四六戸、人口一六二九人、学齢児童は一二七人、うち就学児童は八一人。教師は少教頭一人。明治七年（一八七四）九月、栃木県達により公立新宿小学校となった。明治十年十二月、群馬県所轄となり、新宿村は明治十四年十一月、第九学区となった。明治十六年（一八八三）十一月、現在地に本校舎が落成する。就学児童は二〇五人。明治十七年十二月六日、群馬県「甲第八十九号」によって「小学校区域校数指定表」が出され、これによると新宿村は群馬県第百四十七学区となり、山田第二小学校となった。この学区改正により高等科・中等科・初等科をもつ本校となった。

「小学校高等科生徒は道程四十町以下、中等科は三十町以下、初等科は二十町以下（略）そのため高等小学校は方八十町の中央に、中等小学校は方六十町の中央に、初等小学校は方四十町の中央に一校をおく」とした学区改正であった。

明治十八年（一八八五）、近隣の広沢、境野、下新田、一本木の四校を併合し新宿小学校が本校となり、それぞれが第一、第二、第三、第四分校となった。そして、明治十九年（一八八六）四月、分離して新宿尋常小学校となった。明治二十二年四月、「町村合併法」の施行に伴い、新宿村は桐生町大字新宿村となる（『学校沿革誌』『桐生市教育史』）。

さて、野間好雄夫妻であるが、時の群馬県令揖取素彦が進める改革のなかでとりわけ旧幕府方には厳しいものがあったのではないか。揖取は群馬県令になる以前は熊谷県令、その前は足柄県参事（明治五年）であった。野間好雄の長兄銀次郎行信は遊撃隊士として、戊辰戦役に参加し箱根山で活躍したが敗北、慶應四年六月十二日切腹し果てた。その武勇伝を後の足柄県参事の揖取は風聞として聞いていたものと思われる。

野間清治は明治十一年（一八七八）十二月十七日に生まれた（原戸籍では明治十二年一月十七日と一月遅い。これは、当時、生まれてもすぐに亡くなる事情があったためか、ある程度の成長を確認してから届けたものであろうか）。

明治十三年（一八八〇）八月、県令揖取の命を受けた元東京府士族の金谷吉九郎督業教師（当時二十九歳。山田郡担当の今日でいう群馬県内巡回の指導教官）が赴任するや学校改革に取り掛かった。

後に金谷校長は「在勤尓来本務ニ従事シ孜々勉励専ラ生徒ヲシテ善良ナラシムル等教導ニ注意ス　故ヲ以テ衆庶ノ名望アリ且校舎建築ノ成ル又本人平素生徒教育上尽力ノ餘徳ニ基因スルモノ多シ」と住民から賛辞を得ている。

その彼をして、まず野間好雄夫妻の罷免と教員宿舎からの立ち退きであった。

新築規模大講堂高数尋
瓦棟衝雲起石礎入地深

群馬県令の揖取素彦の揮毫した書が残る。初代校長は金谷吉五郎。

明治十六年十一月の校舎落成時には、野間親子は教員宿舎には住していない。

教職も追われている。親子の生活は厳しいものがあったことが『野間清治伝』から垣間見ることができる。

治政家として数々の功績を残した揖取ではあるが、長州藩士であった。しかも吉田松陰ゆかりの人でもあった。

明治十七年（一八八四）三月三十一日、野間清治は新宿小学校へ入学する（『野間清治伝』）。

そして、その年、新宿小学校は山田第二小学校と校名を変更。明治二十一年（一八八八）三月、尋常小学校を卒業し、同年四月、山田第一小学校へ入学する。波瀾万丈の人生が始まる。

（以下次号）